

第9回東アジア人文学フォーラム 「東アジアにおける人文学の復興」

李 成 市

The 9th East Asian Humanities Forum “Reconstruction of the Humanities in East Asia”

Sungsi LEE

2017年12月16・17日の二日にわたって、総合人文科学研究センターは、第9回東アジア人文学フォーラム「東アジアにおける人文学の復興」を主催した。

同フォーラムは、2009年から東アジアの大学5校（漢陽大学〔韓国〕、南開大学〔中国〕、国立台湾大学〔台湾〕、清華大学〔中国〕、早稲田大学文学学術院）が東アジア地域の学術交流の緊密化を期して行ってきたが、第9回目が早稲田大学小野記念講堂で開催された。このたびのフォーラムには、上記の4校から来日した19名の発表者・モデレーターに加えて、文学学術院の教員、学生が来場し、フォーラムは両日にわたって盛況のうちに閉幕した。

この間、東アジア諸国の5大学が人文学研究を通して、学術交流を重ねてきたが、このたびは、東アジアにおける人文学の共通の知的基盤を確認しながら、新たなフォーラムの展望を模索する意欲的なものであった。当日は、大藪泰文学学術院長の開会挨拶に続き、主題である「東アジアにおける人文学の復興」にちなみ、邱錦榮氏（国立台湾大学）「In Search of New Directions for Humanities Education」、貝澤哉氏（早稲田大学）「人文科学方法論の基礎的問題と現代的課題へのアプローチ」の二つの基調講演がなされ、引き続き4つのセッションで発表と討議がなされた。

第9回フォーラムの主題に掲げた「人文学の復興」の前提には、私たちが従事する人文学研究が危機を迎えているという問題意識がその前提にある。近代の人文学は、文学、歴史、思想のいずれも、民族や国家の歴史的、文化的伝統や、その背後にある国民精神の形成と発展を科学的に裏付けることで、市民社会の形成や国民国家の建設および国民意識の形成に不可欠なナショナリズムを支える重要な社会装置としての役割を担ってきた。

しかしながら、20世紀末からの急速なグローバル化の進展や社会の多様性の増大によって、国民国家の制度的な枠組みや、その基盤となるナショナリズムのイデオロギー性が露呈し始めたことで、従来の近代人文学の諸分野は、その歴史的な出自や学問としての存立意義が改めて問われている。このような人文学の置かれた現状は、貝澤哉氏の基調講演によって明快な指摘がなされた。東アジアの人文学は、この地域に独自に形成された知的基盤を共有しながらも、後発の近代国家形成に資するために、まさに、この時期に帝国主義的な発展を遂げた近代日本が受容した西洋の人文学が東アジア諸国に多大な影響を及ぼしている。その事実、20世紀初頭における東アジアの知識人の交流が示しているとおりである。

また、現在の東アジア地域における葛藤の要因の一つに歴史認識問題があるが、その基底には国民主義的な歴史学があり、葛藤を繰り返す中で、相互の国民主義を強化しているところがある。そのような国民主義的な歴史学の起源をたどれば、19世紀末20世紀初頭の近代日本の国民主義的歴史学に起源を求めることができる。それらは知識人の交流によって東アジア地域に急速に広まり共有されてきたといえよう。

人文学の歴史的な出自や学問的な存立意義が改めて問われるのは、そのような近代人文学の学知では地球規

模で急速に変容を遂げる現実を捉えきれないという危機感に由来する。人文学が危機に直面している今こそ、相互に知的範型を共有している東アジア文化圏では、その危機の所在を明確にし、変容を遂げる時代に応える人文学の新たなあり方が求められているのではないか。そのような知的な営みをあえて「人文学の復興」と名付けて討議に供することにした。

東アジアにおける人文学の形成は二千年近い伝統を有しながらも、近代がもたらした変容については、このたびのフォーラムにおいて新川登亀男氏の詳細な報告があった。引き続き、東アジアにおける人文学の現在を討議しつつ、東アジアの「人文学復興」に対する活発な議論が期待される。このたびのフォーラムでの発表論文をここに掲載する所以である。

